

犬飼遺跡第2次緊急発掘調査報告書

——蓼科山北麓における平安時代後葉期の調査——

1978

長野県東信土地改良事務所
望月町教育委員会

序

ここに刊行されるに至った報告書は、県営圃場整備に伴ない、昭和53年11月から12月にかけて行なわれた犬飼遺跡の報告書であります。

近年、社会の急激な変化に伴なって発掘調査が行なわれております。望月町も圃場整備事業や国道バイパス建設工事により序々にではありますが、発掘調査の件数が増してきております。

長い歴史に埋もれた先人の文化を発掘調査を通して知り、学問として高め、さらに今後の社会における文化を創造していく上において誠に大切なことであると思います。一方祖先が残した貴重な文化財が破壊され、失なわれていくのは残念なことにも思われます。

今回の犬飼遺跡発掘調査は、長野県東信土地改良事務所の協力を得て望月町教育委員会が発掘を担当いたしました次第ですが、大変広い調査面積と、寒風の吹きすさぶ中多くの日数そして費用を要しました。ここに所期の目的を達することができましたことは、調査団長の森嶋 稔氏、その他調査員、地元作業員の協力の賜と衷心から敬意と感謝を申し上げます。

本調査を期に、「犬飼会」という文化財を考え、研究していくこうという会が地元の皆様からの声で結成されました。文化財に対する理解を深めるという意味でも大変意義深い調査になり、誠に嬉しい限りであります。本書が文化財理解のための一助になりますことを祈願するとともに、本調査に御協力下さった方々に対し厚くお礼の意を表します。

昭和54年3月

望月町教育委員会
教育長 佐藤初雄

例　　言

- 1 本書は、昭和53年に長野県東信土地改良事務所と北佐久郡望月町教育委員会との契約に基づいて作成した発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、望月町教育委員会が委嘱した発掘調査団によって行なわれ、本書の作成も発掘調査団が行ない、発行は望月町教育委員会が行なった。
- 3 遺構図は、坂口直樹、西沢 浩、福島邦男が行ない、福島が整図を担当した。
- 4 遺物の実測は、森嶋 稔、西沢 浩と福島が行ない、整図は森嶋と福島が担当した。
- 5 写真撮影は渡辺重義と福島が行ない、図版の作成は柳沢吉男と福島が担当した。
- 6 本文の執筆は、文責を文末に明記した。
- 7 本書の編集は福島が行ない、森嶋 稔調査団長の校閲を受けた。
- 8 遺物及び関係諸記録は望月町教育委員会で一括保存している。

目 次

序

例 言

第1章 発掘調査の動機と経過.....	1
第1節 発掘調査の動機と目的.....	1
第2節 調査の構成と調査団の編成.....	1
第3節 発掘調査日誌	3
第2章 遺跡の環境.....	7
第1節 地理的環境.....	7
第2節 考古学的環境.....	7
第3章 遺構と遺物.....	11
第1節 第4号住居址と出土遺物.....	12
第2節 第5号住居址と出土遺物.....	18
第3節 第6号住居址と出土遺物.....	18
第4章 包含層出土遺物	19
第5章 総 括.....	20

挿 図 目 次

第1図 犬飼遺跡位置図及び周辺主要遺跡分布図	8
第2図 犬飼遺跡地形図及びグリッド配置図	11
第3図 第4号住居址平面プラン及び断面図	12
第4図 第4号住居址出土遺物	14
第5図 第4号住居址出土遺物	14
第6図 第4号住居址出土遺物	15
第7図 第4号住居址出土遺物	16
第8図 第4号住居址出土遺物	17
第9図 包含層出土遺物	19
第10図 犬飼遺跡の壆・塙集成	21

図 版 目 次

第一図版 犬飼遺跡全景・犬飼遺跡の近景

第二図版 第4号、第6号住居址と浅間山遠望・第4号住居址

第三図版 第4号住居址北側カマド・第4号住居址東側カマド

第四図版 第4号住居址東側カマド・同貼床下部の状態

第五図版 第4号住居址東側カマドの遺物・同床面遺物出土状態

第六図版 第4号住居址出土遺物

第七図版 第4号住居址出土遺物

第八図版 第4号住居址出土遺物

第九図版 包含層出土遺物・調査風景、浅間山を臨む

第1章 発掘調査の動機と経過

第1節 発掘調査の動機と目的

犬飼遺跡は、かねてより分布調査によって微量ではあるが平安時代の遺物が散布していることが知られており、また、時折中世の陶器片が出土していたため、平安時代から中世にかけてのなんらかの遺構が存在している可能性があるということで注目されていた。

本遺跡は、昭和53年3月、望月町教育委員会と犬飼遺跡発掘調査団が主体となり、国道142号線バイパス建設工事に先立って、本遺跡にかかるルート内の埋蔵文化財を調査した。

その結果、平安時代の竪穴住居址3棟(第1号～第3号)、同ピット群2ヶ所(第1・第2)、同集石土塙1基、中世の配列ピット群2ヶ所(第1・第2)、同土塙1基が検出されている。また、遺物に関しては、繩文式時代、古墳時代、平安時代、中世、近世のものまでが出土しており、かなり長期に渡って、直接的にも間接的にも生活の場として求めていたことが明らかになった。

以上の調査を経過するなかで、同年6月に東信土地改良事務所より、やはり同じ本犬飼遺跡が、圃場整備事業の対象となっているので調査して欲しいとの依頼が望月町教育委員会にもたらされた。本地区の圃場整備事業は、立科町工事区であったが、地籍は望月町分であるところから、東信土地改良事務所、立科町教育委員会及び望月町教育委員会三者の会議をもち、その結果、望月町教育委員会が調査主体となり進めていくことになった。

その後、調査のための準備や調査団会議を開き、11月20日より調査が開始された。

(福島邦男)

第2節 調査の構成と調査団の編成

1. 遺跡名 犬飼遺跡
2. 遺跡所在地 長野県北佐久郡望月町大字茂田井字犬飼
3. 調査委託者 長野県東信土地改良事務所
4. 調査受諾者 望月町教育委員会
5. 調査面積 2,410m²
6. 調査期間 昭和53年11月20日～12月28日
7. 調査方法 グリッド方式による平面発掘(3m×3m)

第1章 発掘調査の動機と経過

8. 調査団の編成

団長 森嶋 稔(日本考古学协会会员・上山田小学校教諭)

調査主任 福島邦男(日本考古学协会会员・望月町天来記念館学芸員)

調査員 塩入秀敏(長野県考古学会会員・上田女子短大講師)

百瀬新治(") 武石村依田窪南部中学校教諭)

児玉卓文(") 上田染谷ヶ丘高校教諭)

渡辺重義(")

坂口直樹(") 独協大学学生)

西沢 浩(") 明治大学学生)

調査補助員 柳沢吉男

作業員 比田井準一・桜井卯作・吉沢弥太郎・吉沢浩矣・大森英七・大沢礼市・橋詰きよ子・福島茂子・竹花 保・竹花得雄・寺嶋亮祐・大角つぎ子・黒沢好雄・遠山実・塩沢由太郎・橋詰悦子・佐藤けさみ・遠山いつじ・遠山菊次・比田井美子・柳公江・武石百合子・飯島久子・大森一尾・大森みち・佐藤辰己・大塚米子・大沢弥生・清水しづ江・大沢はまよ・倉見 花・依田ケサジ・伊沢すみ子・坂口栄子・関田和子・野上あさ子・林口清子

協力者 大沢洋三・鈴木 高(以上望月町文化財調査委員) 竹花組・桜井玲子・押野谷美智子

事務局協力者 佐藤初雄(教育長)・依田慎三(教育次長)・吉川 徹(同和教育課長)・高橋重雄・松本莊雄・平林一郎・小林三枝子・上野早苗(以上望月町教育委員会)・竹花謙一郎(望月町公民館長)

調査事務 篠原一人(社会教育課長)・大森睦男・小林良子

報導機関 信濃毎日新聞・朝日新聞・中部日本新聞・N H K テレビ・望月町公民館報

(事務局 篠原一人)

第3節 発掘調査日誌

11月16日 (木) 晴れ

調査に先立ち、本日より調査地区の桑の抜根作業を開始する。根抜は、竹花組の手を借りバッカフォンで行なう。

11月17日 (金) 晴れ

昨日に引き続き、桑の抜根作業を行なう。

11月18日 (土) 晴れ

ブルドーザーによる表土剥ぎを行なう。包含層までかなり浅い部分があり、ローム層の露出が目だつ。

11月19日 (日) 晴れ

やや冷たい風の吹く中、調査員により3m×3mのグリッドを設定する。グリッドは、北一南をA～Z、西一東を1～16とする。

11月20日 (月) 晴れ

調査現場に参加者が集まり、結団式を行なう。

広範な調査地区であるため北側より仮にA地区、B地区、C地区に分けそのうち南向き緩斜面より掘り始める。O₁₂、O₁₃、P₁₃、P₁₅付近より僅かに須恵器壺形土器が出土する。桑の残根がありしかも土が固いために作業があまりはかどらない。

11月21日 (火) 晴れ

昨日に引き続き、グリッド掘りを行なうとともに、Uグリッドに土層観察のためのトレンチを掘り始める。

各グリッドより数片の遺物が出土しただけであまり出土量が多くない。

11月22日 (水) 曇りのち晴れ

土層観察用トレンチには、表土下に砂質ローム及び小石混りの黄色粘質土層が現われる。

O₁₁、O₁₂、O₁₃、P₁₁、P₁₂、P₁₃、P₁₄より比較的多量の須恵器及び土師器の小片が出土する。ここを仮にA遺物群とする。

11月23日 (木) 曇りのち晴れ

X₄、X₅グリッドより住居址と思われる落ち込みを検出する。この付近は、かなり遺物量が多く、また耕作土が他に比べて厚味を帯びているのでかなりの期待がもたれる。

11月24日 (金) 晴れ

昨日落ち込みが確認されたX₄、X₅グリッド周辺のW₄、W₅、Y₄、Y₅グリッドを掘り、落ち込みの範囲確認作業をすすめる。一辺5m程の方形住居址ではないかとの疑いを強めたが南側の落ち込みラインは確認できない。

第3節 発掘調査日誌

他のグリッド掘りも進めたが、耕作土が浅く、すぐに地山が出てしまう状態である。したがつて遺物量も少ない。

11月25日 (土) 晴れ

C地区にグリッドを設定する。C地区は、地形的にA地区とB地区とのグリッドの距離を一定に保つことはできないので、東西、南北は統一することとし、新たにC地区として、北—南をイーリ、西—東を1~23とする。C地区は、B地区に比べて遺物出土量がかなり多い。

11月26日 (日) 曇り

本日は、休み。1部の人で宿舎にて遺物洗いを行なう。

11月27日 (月) 曇り

W₄、W₅、X₄、X₅、Y₄、Y₅で確認された落ち込みは、住居址であることが解かり、第4号住居址とする。遺構ナンバーは、3月行なわれた犬飼遺跡第1次緊急発掘調査で検出された遺構ナンバーの続きとする。

11月28日 (火) 晴れ

北側斜面にあるA地区のグリッド掘りを始める。遺物がほとんど出土しない。

N₁₂、N₁₃、N₁₄、O₁₂、O₁₃、O₁₄、O₁₅、P₁₂、P₁₃、P₁₄、P₁₅付近には、土師器、須恵器の壺形土器片、甕形土器片がかなり出土しているので、住居址の存在をうかがわせている。この地点は、本遺跡のうちでも最も表土が浅い所であるため、すでに破壊されてしまった可能性も考えられる。

N_{12~14}、O_{12~14}、P_{12~15}の遺物集中区より、破壊されたカマドの跡と思われる焼土塊が見つかる。遺物の集中範囲から見て、プランこそ確認できないが第5号住居址とする。新しい時期の溝状の落ち込みも付近を走っている。

11月29日 (水) 晴れ

A地区は、千鳥方式にて全面掘り下げを終ったが、遺物はほとんど出土せず、また遺構も全く確認できなかった。

11月30日 (木) 曇り

C地区のグリッド掘り下げを進める。相変ず遺物の出土量は多い。しかし、かなり耕作による攪乱が目立ち遺構は確認できない。

B地区のS₅、S₆、T₆、グリッドの掘り下げを続行していたが、遺物が比較的多く出土し、また、第5号住居址と同様破壊されたカマドの焼土塊が検出されたため、第6号住居址とする。

12月1日 (金) 曇り

第5号住居址と第6号住居址のプラン確認作業を行なう。両遺構とも耕作による攪乱によって完全に破壊されていることが明らかになった。また第4号住居址プランの再確認を行なう。南側に傾斜する地形であるため、南側壁面は耕作により破壊されたことが明確となる。

12月2日 (土) 雨

本日は、雨天のため遺物の洗浄作業をする。

12月3日 (日) 晴れ

第4号住居址の覆土掘り下げを行なう。北側壁面よりカマドが確認される。またカマド付近に集中して、土師器、須恵器の壺形土器、甕形土器の破片が多量に出土する。

12月4日(月) 晴れ

昨日に引き続き、第4号住居址の覆土掘り下げを行なう。カマドはかなり崩れており原形を保っていない。壁面は北側ほど高くなつておき、比較的良好な状態であった。床面が現われる。

C地区に於ては、土がやわらかく掘り易いことも手伝つて大分能率が上がつてゐる。依然として遺構がつかめない。

12月5日(火) 晴れ

第4号住居址の南側壁面は、完全に破壊されていることが解った。カマドより完形の須恵器壺形土器が出土するとともに、大きな破片の遺物が比較的多く出土する。北西角に柱穴が確認される。また、この柱穴の掘り切り付近に、焼土塊が存在しているのがみつかった。

12月6日(水) 晴れ

C地区のグリッド掘り下げ部分で、特に遺物が集中して出土する部分が見つかり、住居址ではないかとの疑いをもつ。

第4号住居址の全容がほぼ明らかとなる。

12月7日(木) 晴れ

第4号住居址の清掃作業をする。C地区の掘り下げを続行する。

12月8日(金) 晴れ

第4号住居址の写真撮影を行なう。その後平板測量を行なう。

12月9日(土) 晴れ

第4号住居址の平板測量とともに、出土土器の取り上げ作業を行なう。床面の精査の結果、東南部に落ち込みのあることが確認され掘り下げを行なう。土師器の甕形土器片を中心としたかなりの量の遺物が出土する。また新たにカマド跡が見つかり、本址における古いカマドであることが解かった。

12月10日(日) 晴れ

昨日に続き、第4号住居址の精査を行なう。遺物の出土がかなりの量に及ぶ、掘り下げを完了し、写真撮影のために清掃を行なう。

12月11日(月) 晴れ

昨夜來の雨で、現場作業が不可能となり、遺物洗いをする。

午後、第4号住居址の写真撮影を行なう。

12月12日(火) 曇り

第1号住居址の平板測量を行なう。また合わせて遺物の取り上げを行なう。

C地区は、かなりの面積に及ぶグリッド掘りが成されているが、以前と同様多量の遺物に比べ遺構が全く確認できない。

12月13日(水) 晴れ

第3節 発掘調査日誌

第4号住居址のカマド断面図をとるために断ち割り作業を行なう。焼土内より遺物が僅かに出土する。また、新たに検出されたカマドの精査を行なう。立ち上がり部分は全く存在しないが、焼けた地面より明確にプランをつかむことができた。

12月14日 (木) 晴れ

第4号住居址の2つのカマドの実測を行なう。これによって、第4号住居址の調査は全て完了する。午後から遺跡全体測量を行なう。

12月15日 (金) 曇り

C地区も設定したグリッドはほぼ掘り終り、特に遺物の集中する箇所の精査にとりかかる。遺跡全体測量を引き続き行なう。

12月16日 (土) 曇り

昨日と同様の作業を進める。

すでに12月の中途となり、かなり日中でも寒さが増して來た。

12月17日 (日) 晴れ

C地区に於ては、一段と掘り下げを進め、その結果、焼土と木炭の混在する部分が確認された。

全体測量を行なう。

一部の人たちには、土器洗いをやっていただく。

12月18日 (月) 雪のち曇り

朝から激しい雪が降り出した。雪の降る中全体測量とC地区掘り下げを行なう。

12月19日 (火) 曇り

昨日の作業を続行する。

12月20日 (水) 曇り

C地区は、遺構の存在をうかがわせていたが、プランの確かな立証はできなかった。したがって本日で作業を終了する。また遺跡の全体測量も本日で完了する。

夕方より打ち上げ会を行ない、現場での全ての調査を終了した

12月21日(木)～12月28日(木)

21日より28日まで、一部の人達によって遺物整理作業を行なう。この期間で、洗浄、注記、接合をほぼ完了させた。

一ヶ月余に及ぶ調査の中で、検出された遺構は僅かであったが、一グリッド一グリッド丁寧に調査が進められ、確実に犬飼遺跡の現状を把握できたと考える。

(柳沢吉男・福島邦男)

第2章 遺跡の環境

第1節 位置と地理的環境

犬飼遺跡は、蓼科火山によって形成された低位な丘陵の南斜面上に位置している。この茂田井地区一帯は、同様の低位な丘陵が南北に幾筋も走っており、いずれも小規模でなだらかな地形を成している。しかし、御牧原台地のごとく800m～700mも続く平坦面があまり発達してはおらず、八重原台地の一連の地形であるとはいえ、茂田井付近ともなれば徐々に高度を増し蓼科山の裾野に連なっている。この南北に走る丘陵は、茂田井付近にあっては、新世代第四期更新生ローム及び火山岩屑によって形成されており、表土下十数センチの所すでにみられる。また、砂礫がかなり厚く堆積している部分も見られる。遺跡はこれらのいわゆる筋ともいべき南北に走る丘陵の緩斜面に立地している場合が多い。

犬飼遺跡の眼下には、規模の小さな下川が流れしており、かつてはこの川によって形成された小河岸段丘が発達している。この地帶には、3ヶ所の湧水と1ヶ所の鉱泉があり、現在でもかなり水量が豊富である。低地に於てはむしろ湿地状になっており、この湿地帯を望む所にこの付近一帯の遺跡が存在しているとも言える。

いずれにしても本遺跡は、南向き緩斜面で、非常に日当りの良い所に立地していると言える。

(福島邦男)

第2節 考古学的環境

茂田井地域は、立科町と境を隔てる丘陵から東側のややすり鉢状の地形を成し、観音寺に向って流れる下川の深い谷の南側に遺跡が集中している。これらの遺跡は、台地とやや湿地性に富む水田面に立地している繩文式時代の遺跡と、丘陵斜面あるいは扇状地形に立地している平安時代の遺跡とに大きく大別することができ、また、台地に立地する奈良時代から平安時代にかけての寺院と思われる所もある。

以下遺跡ごとにその概要を述べておく。

第2節 考古学的環境



第1図 犬飼遺跡位置図及び周辺主要遺跡分布図（1：40,000）

① 天神反遺跡(茂田井字天神反)

犬飼遺跡の南方200mの上部平坦な台地上に位置している。この遺跡は、縄文式時代中期、奈良時代～平安時代の遺物が多量に出土している。まだ発掘調査はないが、縄文式時代中期後葉の深鉢形土器、打製石斧、磨製石斧、スクレーパー、石皿、凹石、多孔石、石棒、石匙、土偶等ありとあらゆる生活セットが耕作や表面採集の時にみつかっている。縄文式時代の遺跡としては望月町の中では最大級のものである。また、同様の地点に布目瓦がやはり多量に散布しており、かつて信濃の妙楽寺がここにあったという伝説がある。

② 用水尻遺跡(茂田井字用水尻)

本遺跡は、天神反遺跡のある台地のすぐ下、東側の水田及び畑地にある。小字用水尻という地名の通り、湧水から流れ出る水が、本遺跡の中央を通っており、非常に水量の豊富なところである。恐らくは天神反遺跡と一連の遺跡であろうと推察できうる。現在でもかなり遺物の散布量が多いが、縄文式中期末葉の深鉢形土器、打製石斧、磨製石斧、石皿、凹石、石棒、石匙、ヒスイの曲玉、土偶等が出土している。

③ 花立遺跡(茂田井字花立)

花立遺跡は、天神反遺跡に続く南側の台地上と西側の第一段丘上に位置している。遺跡の中 心部には現在人家が立ち並び、また大部分は水田となっている。本遺跡も恐らくは天神反遺跡と用水尻遺跡との一連の遺跡であろうと思われる。出土遺物には、縄文式時代中期の深鉢形土器をはじめ、打製石斧、磨製石斧、石皿、凹石、石臼、石棒等の豊富な遺物が出土している。

④ 夜討村遺跡(茂田井字夜討村)

茂田井地区に於いては代表する平安時代の遺跡である。夜討村遺跡は、犬飼遺跡の対岸の扇状地、下川の流れる低位水田面より東側へやや登った所に位置しており、東西200m、南北150mを測る大きな遺跡である。近年、朝鮮人蓼耕作や畠地の区画整理によってかなり破壊されてしまった。出土遺物は、須恵器を中心とした壺形土器や甕形土器が多数あり、そこに土師器が伴なうというあり方をしている。また灰釉陶器も僅かながら出土している。

⑤ ⑥ 大仁反及び大仁反尻遺跡(茂田井字大仁反・字大仁反尻)

本遺跡は、犬飼遺跡の北方350mの丘陵上に位置している。この両者の遺跡は、犬飼遺跡の存在する丘陵上にあるが、立地的には犬飼遺跡とかなり似かよっている。犬飼遺跡発掘調査中に朝鮮人蓼耕作のための深掘りを行なっている時に5基以上のカマド跡がみつかり、また多数の須恵器壺形土器、甕形土器、長頸壺、土師器の甕形土器が出土した。すでに調査せずに大部分が破壊されてしまった。恐らくは、犬飼遺跡、夜討村遺跡と並ぶかなりの集落址があったと思われる。

⑦ 堀込峯A遺跡(茂田井字堀込峯)

堀込峯A遺跡は、望月町と立科町とを分ける南北に走る尾根の東側斜面に位置しており現在はブドウ畠となっている。ここからは、犬飼遺跡をはじめ天神反遺跡や夜討村遺跡など、この付近一帯の遺跡を全て見わたすことができる。遺跡は、土師器と須恵器で散布量はあまり多くない。

⑧ 堀込峯B遺跡(茂田井字堀込峯)

望月町と立科町を分ける尾根上を通っている農道の西側の畠地が遺跡である。この付近では最も高い尾根の一つもあるため、望月分と立科分とを一処に見わたすことができる。遺物は、ごく僅かな土師器と須恵器が散布している。

⑨ 南青木原遺跡(茂田井字南青木原)

本遺跡も、堀込峯A及び堀込峯B遺跡と同様の尾根上に位置しており、遺物は土師器と須恵器で散布量が少ない。

⑩ 又久保遺跡(茂田井字又久保)

又久保遺跡は、望月から国道254号線で茂田井に入った南側の低位な沢状の地形を成してい

第2節 考古学的環境

る所に位置している。ここには、尾根の中腹を通る小さな峠道があり、付近には「古道」と名付けられている小字名が残っている。出土した遺物は、小形耳皿、手づくねの小壺があり、いわゆる祭礼用遺物として捉えることができる。これらは、先の例にもれず朝鮮人蓼耕作の時に出土したものである。

以上概略的に周辺に位置する遺跡を述べてきたが、犬飼遺跡と近似するものとしては、やはり夜討村遺跡と大仁反、大仁反戻遺跡があげられるかと思われる。しかし、この三者も犬飼遺跡と比較すると若干時期的に新しさが目だつ。その意味では、犬飼遺跡が茂田井地区の平安時代の遺跡としては、最も古く位置づけられ重要性が認識されるところである。

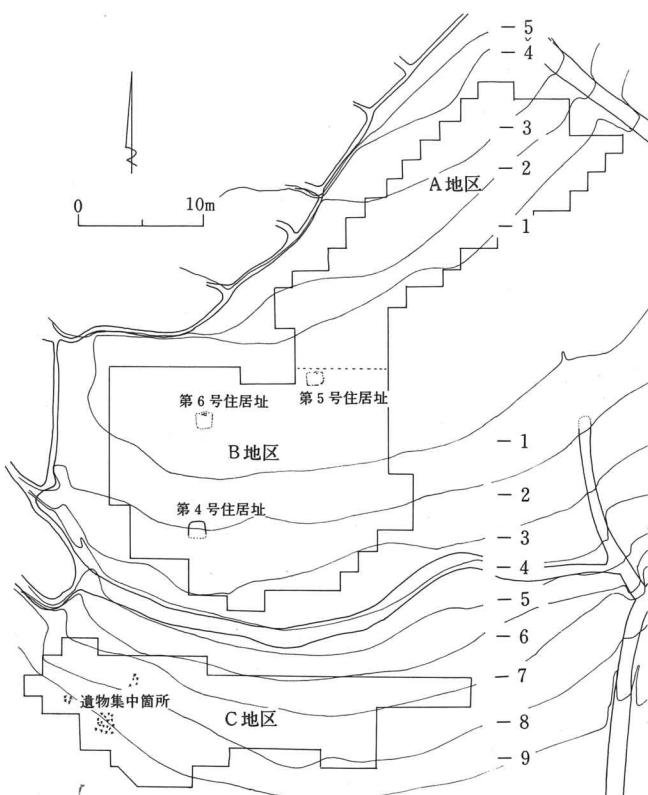
(福島邦男)

第3章 遺構と遺物

犬飼遺跡第1次発掘調査に於ては、平安時代の住居址3棟、同集石土塙1基、同ピット群2ヶ所、それに中世の配列ピット群2ヶ所(高床式建物址)が検出され、平安時代中期初頭から中世までの遺構が確認されている。

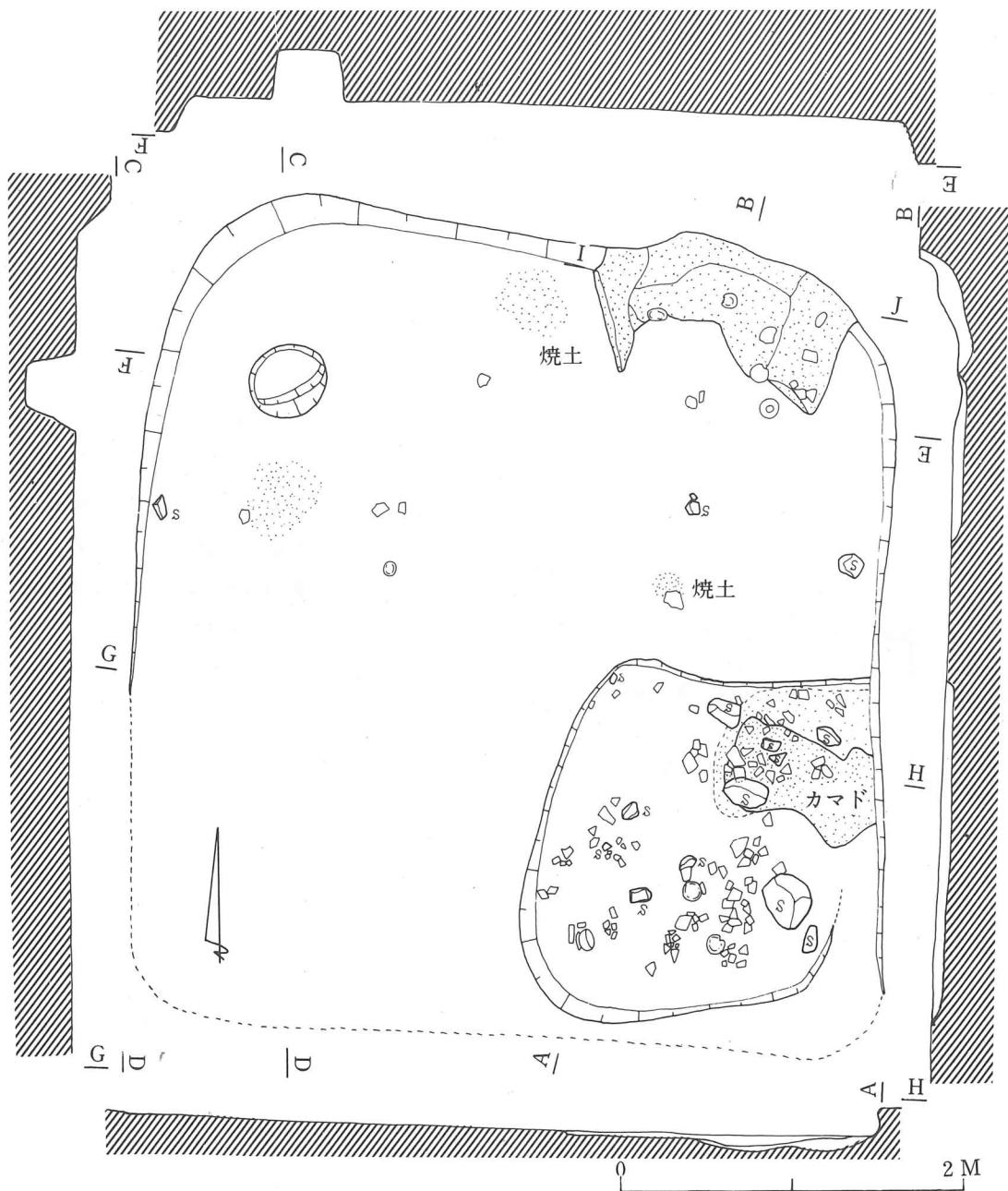
本第2次調査に於いては、平安時代初頭の住居址3棟が確認され、他に遺物が濃密に集中する所があったが、遺構としては捉えることができなかった。

遺物は、縄文式時代、古墳時代、平安時代、中世、中世以降のものが出土しており、遺構に伴なうものは全体からすると少なかった。これらの遺物の傾向は、第1次調査と同様である。



第2図 犬飼遺跡地形図及びグリッド配置図 (1 : 800)

第1節 第4号住居址と出土遺物



第3図 第4号住居址平面プラン及び断面図(1:40)

遺構(第3図・第2図版)

本址は、南側緩斜面であるB地区の西寄りの所で検出された。A地区とB地区の接点であるPグリッド部分が、本遺跡では最も高い位置に当り、そこよりなだらかな斜面を下ったX₄、X₅、Y₄、Y₅にある。遺跡全体の耕作土が浅く、しかも傾斜しているため、他の第5号、第6号住居址の例にもれず耕作により削られてしまっている部分が目立つ。

プランは、東西4.4m、南北4.7mを測る隅丸方形を成しており、壁高は、最も高い部分で25cm、そこから南側に続くに従ってしだいに低くなり、南側壁面は耕作により完全に削り取られてしまっている。壁面はかなり固く締まっているところから、タタキが成されたことも考えられる。カマドは、北側壁面に沿った中央よりやや東寄りに存在し、さらに東側壁面に沿った所にも確認された。この二つのカマドはもちろん本址に伴なうものであり、また新旧の関係として捉えることができる。東側のカマドは、すでに上部構造が存在せず、しかも貼床の下で見つかっている。恐らくこのカマドが先に使用され、取りこわして貼床を行ない、新たに北側に構築したものと考えられる。焼土しか残っていないこのカマドは、長さ95cm、幅60cmを測り、付近には焼けた石が数個存在しているところから、石組みもしくは石と粘土により構築したものと考えられる。一方北側のカマドは、全て粘土により構築されており石は使用されていない。上部構造と塁口部はかなり破壊されているが、全体の形態はよくつかむことができる。現存部で幅140cm、奥行80cmを測り比較的大きなものである。床面は、東側カマドがあった付近は貼床が成され、他はタタキが成されたように固く締まっており、地山(ローム)上というよりもむしろ黒色土との混在された状態であると言つてよい。柱穴は、北西隅に1ヶ検出されたが、他は精査しても検出することができなかった。

遺物(第4～8図・第6～8図版)

本住居址の出土地点は、大きく分けると北側のカマドとその付近、もうひとつは、北側カマドが構築される以前に使用されていたカマド周辺部、すなはち貼床下部となる。その他柱穴周辺部などに僅か出土している。

第5図1は、東濃地方より投ち込まれたと思われる灰釉陶器の皿形土器である。全体にかなり丁寧に水引きが行なわれている。底部には付け高台が成され、その部分に対してヘラ整形が行なわれている。灰釉は口縁部から胴部中部にかけて付けられており、外面は白っぽく、内面は薄茶色になっている。胎土はかなり精製されており、一見して東濃系である。

3～8は、土師器の高付境形土器である。3は半欠品であるが、中では器形が良くわかる資料である。全体が水引きによってかなり厚手に作られており、後に付け高台をしている。外面は赤褐色、内面は薄い黒色の研磨が成されている。焼成はややもろい。4～6もやや器形は小形であると思われるが、外面赤褐色、内面は黒色研磨が成されている。7は足高高台を有する土師器の境形土器である。糸切り底に足高の高台が付けられており、全体が赤褐色を呈し、ややもろい焼成である。

9～12は、皿形を有する土師器の境形土器である。器高は4cm～5cmを測り、口縁部直径13.5

第1節 第4号住居址と出土遺物

cm~14.3cmである。この4点の傾向は、口縁部の直径が小さい程器高が高くなるということがみられる。器厚はほぼ一定している。これらの土師器で特に言えることは、口縁部になるほどしだいに薄くなり、口唇に至ってやや肥厚しながら外反していることである。9~11は内面黒色研磨である。

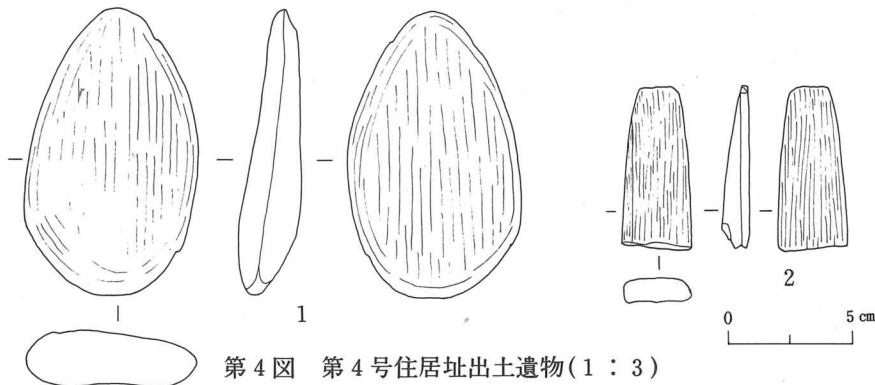
13は、土師器の皿形土器である。口縁部直径13cm、器高2.6cm、厚さ0.3cm~0.5cmを測る。口縁部はやや肥厚して外反し、そこから外側にややふくらむように出てからいきに底部に至っている。したがって口縁部直下には段がめぐっている。また底部は高台作出がごく厚味をもたせ段をつけて糸切りを行なっている。外面は赤褐色、内面は黒色研磨を行なっており、焼成はややもろい感がある。本品は、貼床下部より正位で出土しており、完形品である。

第6図14~16は、火だすきのある須恵器壺形土器である。器形が全体にゆがんでいるところが特徴である。内面及び外面にかなり強く火だすきの痕がついている。底部から胴部への立ち上がり部が3点とも肥厚しており、胴部は壺形にやや丸味を帯びている。14には口縁部直下に「平」の墨書が描かれており、本遺跡唯一のものである。「佐久平」あるいは、「何々平」の意味であろうか。第1次調査に於て、高台付壺形土器の底部に、ヘラによって「佐」という刻字が行われているものが包含層から出土しているが、あるいは関連するものであろうか。

17~24は、須恵器壺形土器であるが、その焼成方法と製作技法により若干の差異を認めることができる。17~19は、乳灰色及び乳白色を示す瓦質の焼成で、まことに良質の資料である。20~22は、酸化炎焼成による須恵器であり、言ってみれば焼きそないとでも表現できようか。したがって器面の色がかなり異なっており、黄赤褐色の部分や黄灰色の部分などがある。しかしそれほどもろさではなく比較的固い。その23~24は、水引き整形の後糸切りを行ない。その後ヘラけずりを行なっているものである。図上復元のできない破片の中に、糸切りを行ないその後ヘラけずりを行なっているものがかなり多量に含まれていることを付け加えておく。

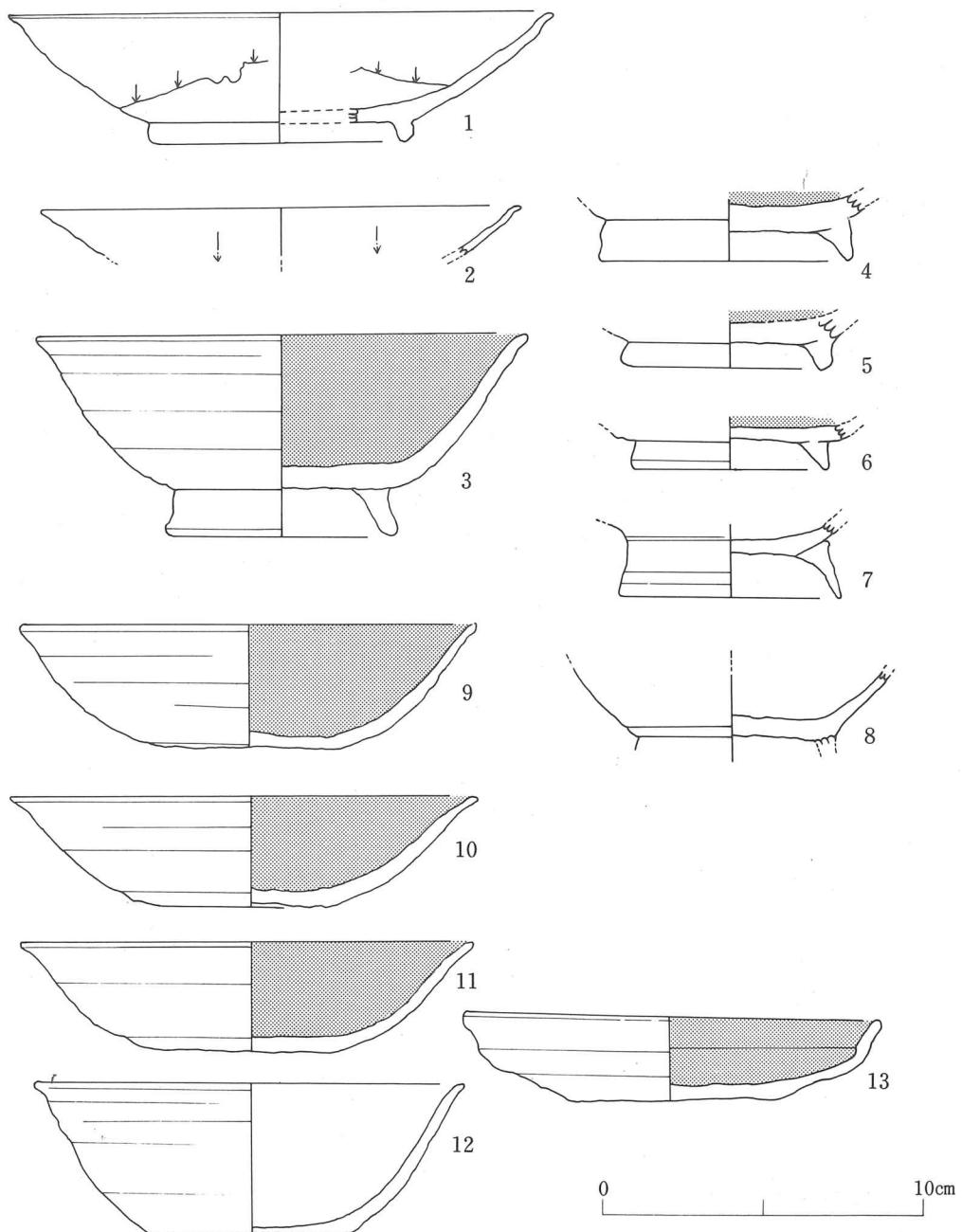
第7図25~28は、土師器甕形土器である。いずれも水引きにより作られており、口縁部はヘラによる横なで整形、また、25・26は頸部から胴部にかけて、横方向のヘラけずりが成されている。

本址に於て出土した多量の遺物のうちの一部のみを図示したことと付記しておく。(福島邦男)



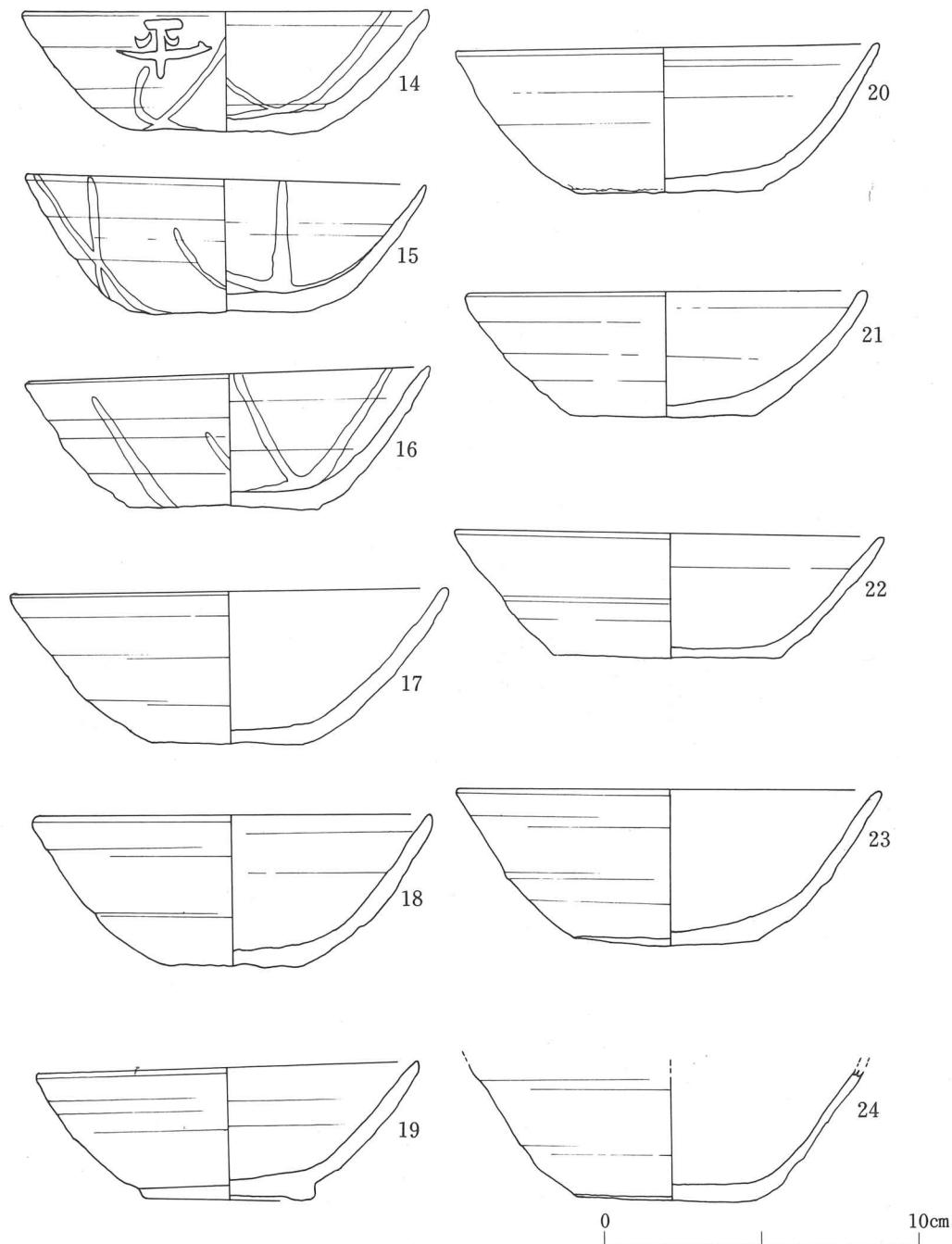
第4図 第4号住居址出土遺物(1:3)

第1節 第4号住居址と出土遺物

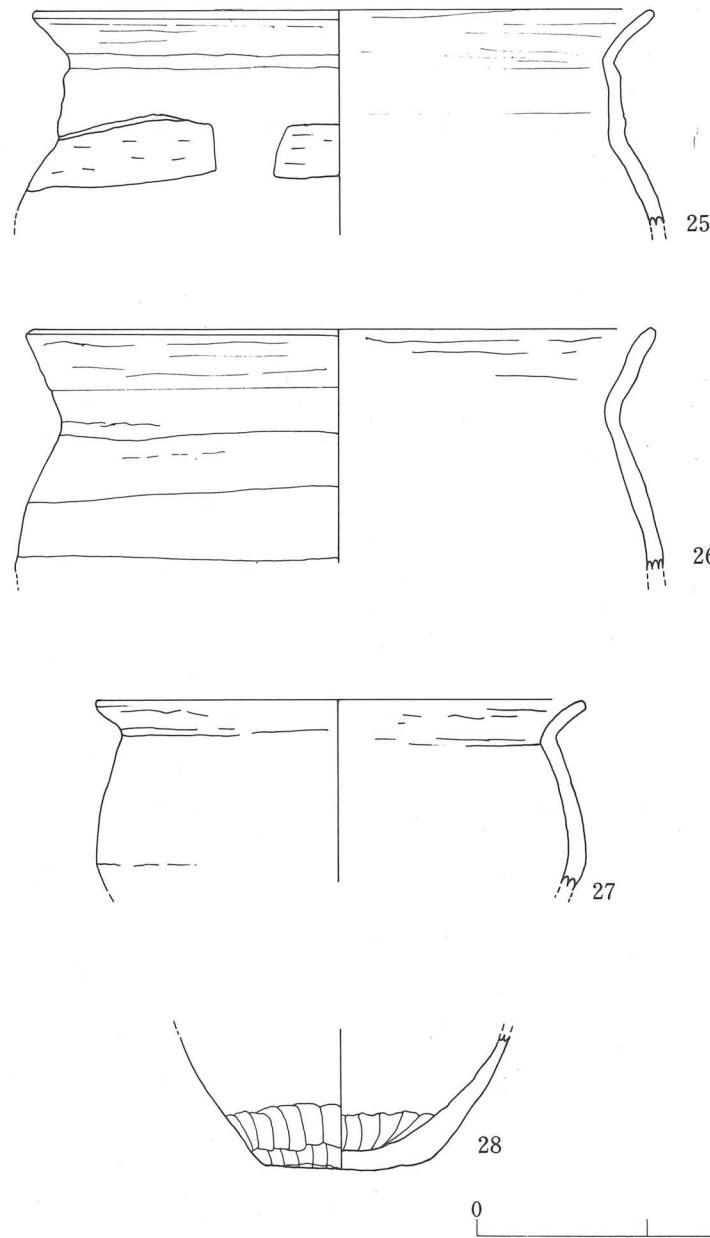


第5図 第4号住居址出土遺物(1:2)

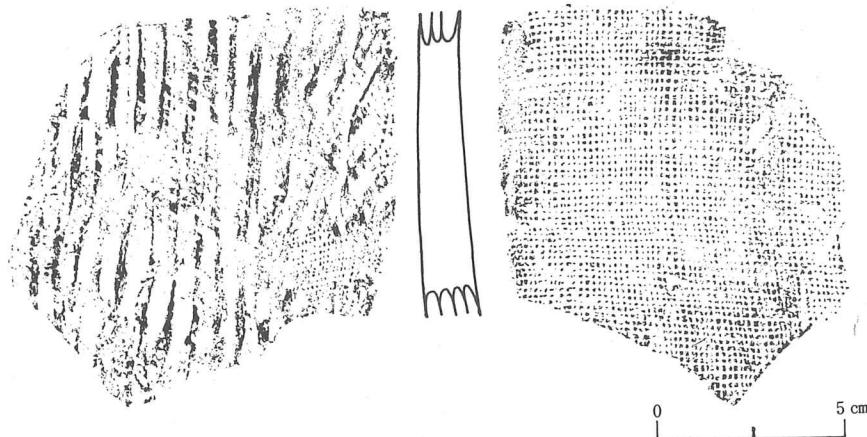
第1節 第4号住居址と出土遺物



第6図 第4号住居址出土遺物(1:2)



第7図 第4号住居址出土遺物(1:2)



第8図 第4号住居址出土遺物(1:2)

第2節 第5号住居址と出土遺物

遺構(第2図)

本址は、本調査地区に於いて最も地形的に高い所で検出され、かかるグリッドはO₁₂とP₁₂グリッドとの中間点である。前記したようにカマドの残存部が僅かに検出されただけで、住居址プラン等も耕作による破壊が激しく確認することができなかった。

遺物

遺物は、このカマド残存部付近で比較的多く出土しているが、プランもつかめず確実に本址に伴なうものかどうかの疑問も残るのでいちおう包含層遺物として処理をした。

器種は、土師器の壺形土器を主体に、土師器、須恵器の甕形土器及び須恵器の壺形土器が出土している。(福島邦男)

第3節 第6号住居址と出土遺物

遺構(第2図・第2図版)

本址は、第4号住居址の北側で検出され、かかるグリッドはS₆である。第5号住居址と同様耕作による破壊が激しく、僅かなカマド残存部を残すだけで他のプランは全く存在していなかった。

遺物

やはり本址の遺物も第5号住居址と同様にカマド付近に散乱していたが、住居址に伴なうものとしては処理しなかった。したがって包含層遺物とした。

器種は、土師器、須恵器の壺形土器、甕形土器片が出土している。

(福島邦男)

第4章 包含層出土遺物

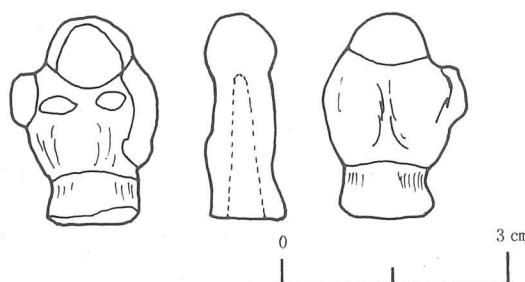
本調査地区に於けるグリッドから出土した遺物は、B地区及びC地区に集中しており、A地区に於ては皆無といってよいほどであった。

B地区では、前記したように第5号住居址と第6号住居址の周辺部に集中しており、遺構の破壊に伴なう散乱であると思われるが、いちおう包含層遺物としてとり上げているものが中心を成している。C地区に於ては、ほぼ全体に出土が認められたが、特にホートグリッドよりかなり濃密に出土している。このC地区の出土のあり方は、第1次調査のそれと同様の状態がみられる。

出土遺物は、土師器及び須恵器の壺形土器片、甕形土器片が主体を成しており、その他中世、近世の陶器片や時期不詳(江戸時代頃のものか)の人形を呈する土製品(ドロメンコ)(第9図・第9図版26)などがある。また縄文式時代の打製石斧(第9図版27)やスクレーパー(第9図版29)、それに黒耀石片などが出土している。

全体の傾向として平安時代後葉の遺物を主体にかなり時間的に幅のある遺物が出土していることが特徴といえる。

(福島邦男)



第9図 包含層出土遺物(1:1)

第5章 総括

犬飼遺跡の第2次調査の焦点は、第4号住居址のあり方をめぐるものであろう。

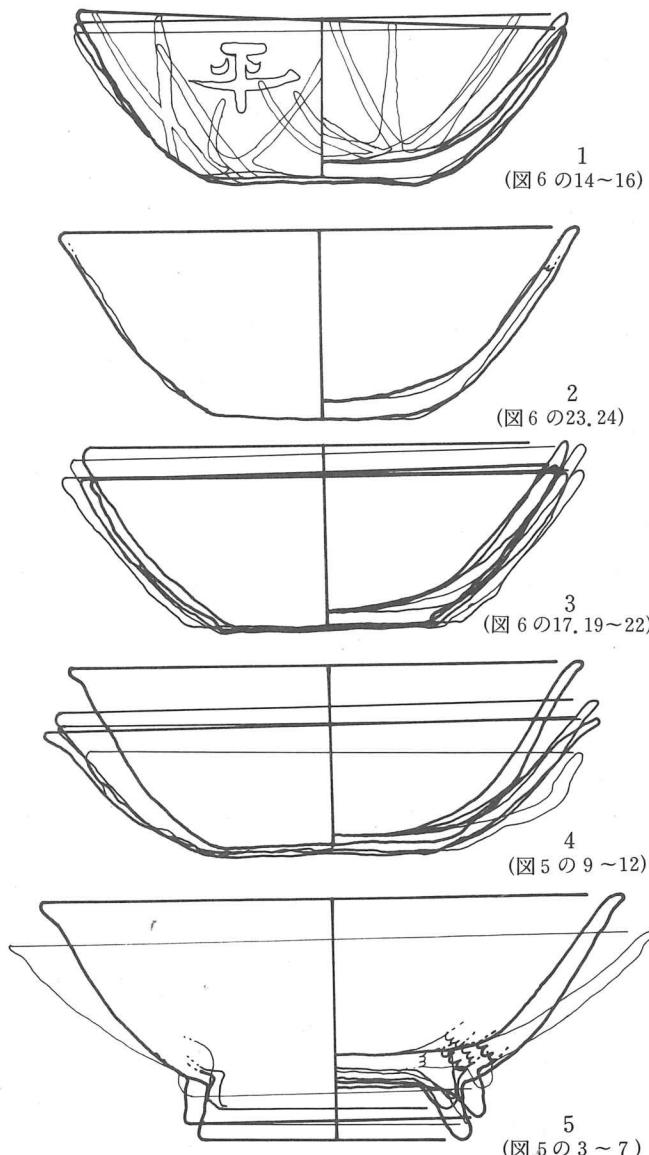
第4号住居址は、その構造上の問題としてまずこの住居址が補修されたものであるということである。東側にかつてあったと思われるカマドを廃絶して、北側の中央東寄りに再構築しているのである。古い位置のカマドは廃絶後、きれいにその周辺の附属遺構とともに整地され、粘土によるていねいな張り床となっているのである。その床面補修の際、ここに多量な土師器及び須恵器の資料群が埋没されたのである。ここにはその資料の三分の一以下を提示したにとどめたが、あまりにも量的に見て、例外な程多いことに注意しなくてはならない。しかしその多くは、あまりにも小片であって図上復元も可能でなかったのである。意図的な破壊が行われた後に、カマド破壊、床面補修が行われた際に埋没されたものであるかもしれないである。

カマドの位置について見ておきたい。ともに、この住居平面プランの中心軸よりも、右に片寄って構築されていたらしることは明らかである。礫石を基礎として、粘土で固めての構造とみてよい。いずれにせよ、いわゆる千曲川水系第四様式（奈良時代）とそれ以前にはまったく行われなかつた平面プラン上の位置であることは言うまでもない。住居内の床面にもうけられた上屋をささえる柱穴も、明確なものは1本のみであるが、これも、あるいは、積極的には柱穴と言うことはできないかもしれない。ことした不明確な柱穴のあり方もまた第四様式期にはなかつたものである。上屋構造の問題とも関連して、大切な所見である。いずれ第五様式期に入るあり方をしていることに注意されるところである。

遺物群の側面からみておきたい。灰釉陶器は東濃系のざっくりした胎土で、やや焼成のよくないものである。そのコピーとしての土師器の内面黒色処理をした高台付の壇(第10図5)がある。糸切り底の内面黒色の土師器壇(10図4)、そして火だすきのある糸切り底の須恵器の壇(第10図1)、火だすきのないもの(第10図3)、そして更に糸切り底へら調整痕のある須恵器の壇(第10図2)がある。これらは一時期のものとは思われない。すくなくとも最も古い資料がこの壇群であろうし、最も新しいものが、5の高台付の壇であろう。その時間的な開きは、第五様式における第Ⅰ期から第Ⅲ期までの時期を与えることができるものであろうから、すくなくとも1世紀の差が内在しているかもしれない。しかし、それが、仮に一時的の所産と考える(同一住居址収出土である)とこれはまた、第4号住居址の大きな特色とすることができる。古い様式と新しい様式とが混在している特殊なあり方とみなければならぬ。この佐久地方では、灰釉陶器の侵入が必ずしも多くないが、その現実は、意外に須恵器生産の温存となつて結果していたかもしれない、との予想が成り立つ。そうしたとき、ここで見れるような現象が、この地方の普遍的なあり方であるかもしれないと考えることも可能であろう。そう見たとき、第五様式第Ⅲあるいは第Ⅳ期の間にもう一つのステップとしてみることのできる時期であるとすることもできるであろうか。

第10図の集成図は、器体内部の底を基点としたものであるが、これは極めて、示唆に富む課題を明示している。ここでは、課題の存在を提示するにとどめるが、いずれモデルとコピーの問題を中心として、かなり興味ある問題点が内容していることが読みとることができる。

天神反遺跡出土の布目瓦と同様なもの(第8図)が第4号住居址から出土している。天神反に古代廃寺の存在を仮定すると、これはおそらく、9世紀代には存在したものとみてよい資料である。そこに使用された瓦片が、この住居址から出土したということはやはり、重要な所見といわざるを得ない。天神反廃寺の廃絶の時期とも相関する問題でもあるかと思われるのである。注意すべき資料である。



第10図 犬飼遺跡の壺・塙集成

江戸時代末のものと思われるドロメンコが一点採集されている。こうしたものの分布やその背景などつい手のとどく時間的範囲にありながら明確にならないものもある。大方の御教示を得たいところである。

◆

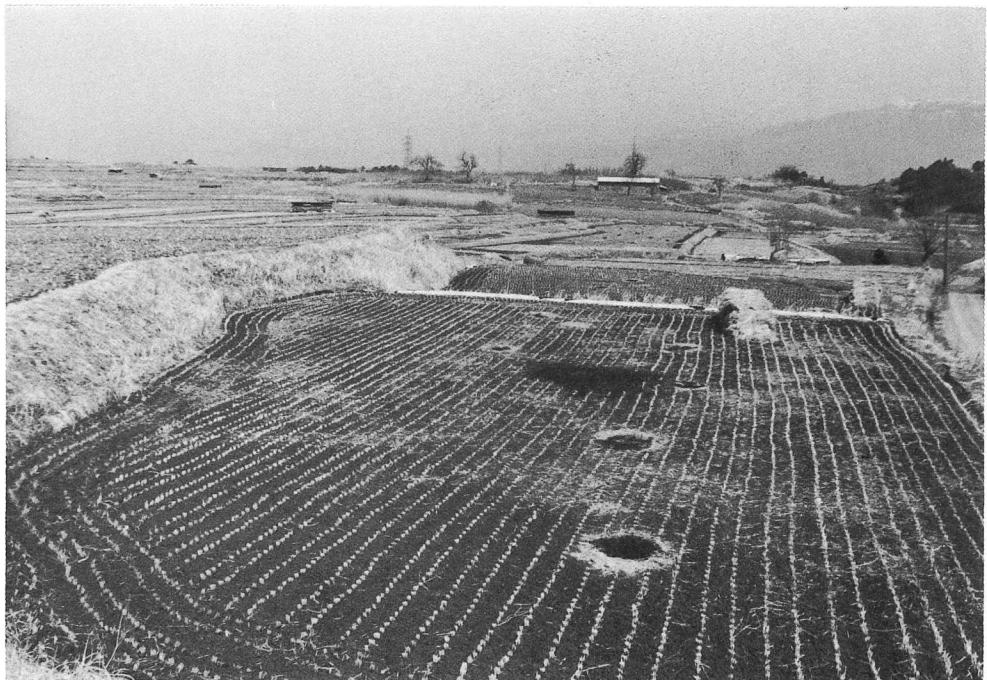
第1次及び第2次を通じて、いわば平安時代から中世來に至るまでの遺構、遺物群を検出したこの犬飼遺跡はかなり、特色のある遺跡地帯であると言いうことができる。とりわけ、中世堂宇をめぐる問題、そして、第5様式第III、第IV期にまたがる第四号住居址のあり方など、特に今後にその認識を深めて行くための大きな手がかりを提供したと評価することができる。本調査の果した大きな役割であった。

終りにあたり、2ヶ年に及んだ調査に献身的な役割を果し、今病を得て療養の身である調査主任の福島邦男君に、深く感謝と御見舞の言葉を捧げるものである。もちろん、調査員、作業員、そして事務局の方々にも深い感謝と敬意を表するものである。

(森嶋 淩)

図版

第一図版 犬飼遺跡全景・犬飼遺跡の近景



1. 犬飼遺跡全景(小屋の周辺部が遺跡)



2. 犬飼遺跡の近景(左の森が天神反・その右が花立の各遺跡)

第二図版

第四号・第六号住居址と浅間山遠望・第四号住居址



3. 手前が第4号住居址・斜め右上が第6号住居址



4. 第4号住居址(西側より)



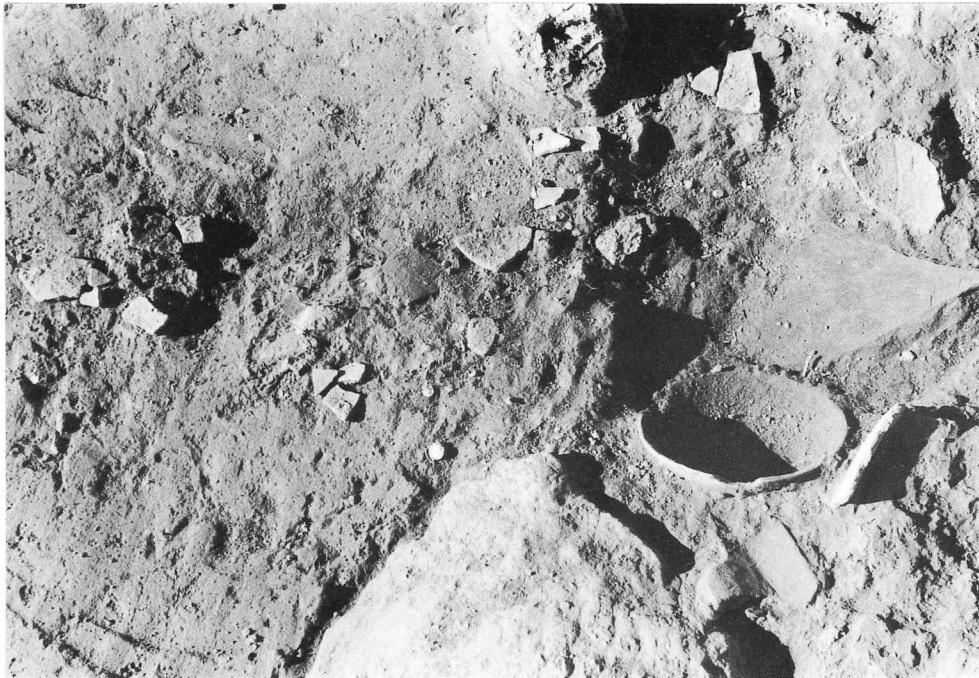
5. 第4号住居址北側カマドと遺物出土状態



6. 第4号住居址東側カマドと遺物出土状態(完掘前)

第四図版

第四号住居址東側カマド・同貼床下部の状態



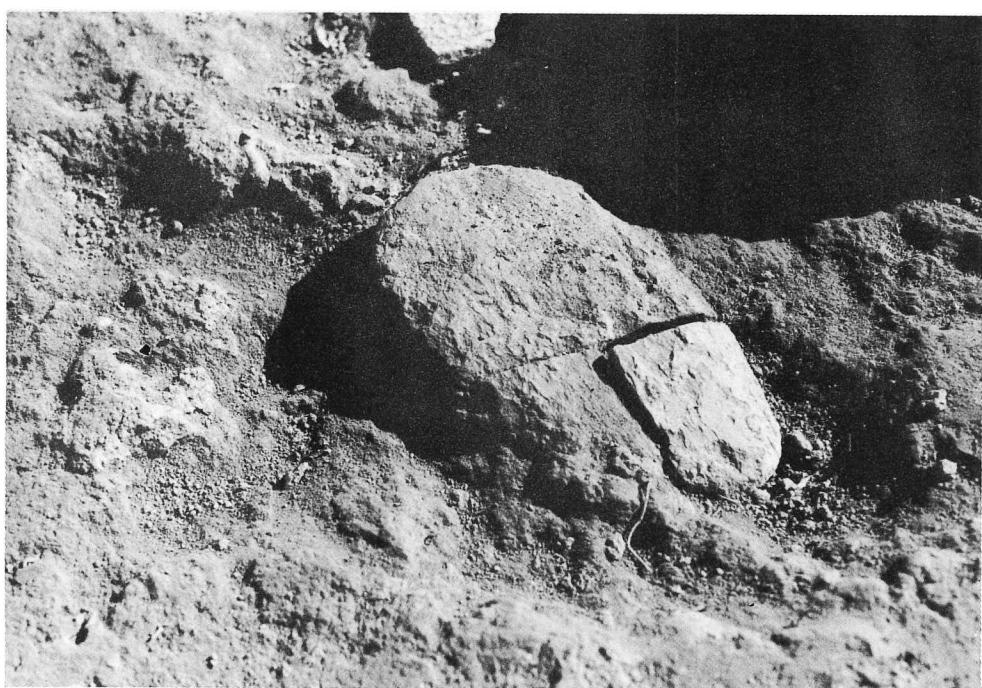
7. 第4号住居址東側カマド付近遺物出土状態



8. 第4号住居址貼床下部の遺物出土状態



9. 第4号住居址東側カマドの遺物出土状態



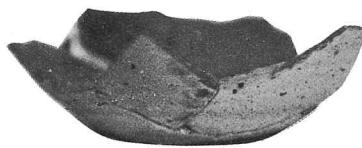
10. 第4号住居址床面出土の石製品

第六図版

第四号住居址出土遺物



11



12



13



14



15



16



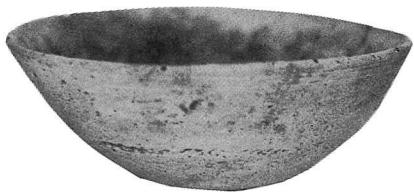
17



18

第七図版

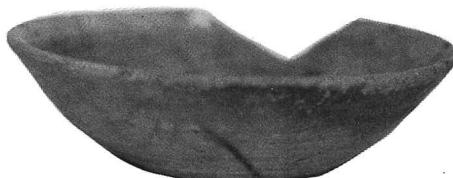
第四号住居址出土遺物



19



20



21

横面より



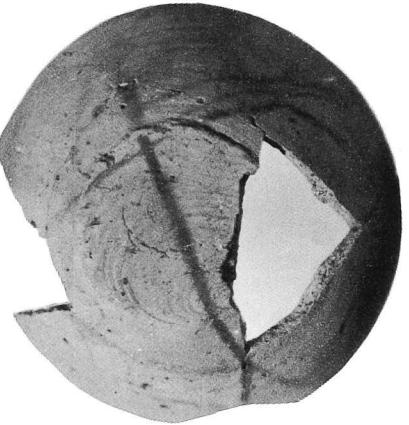
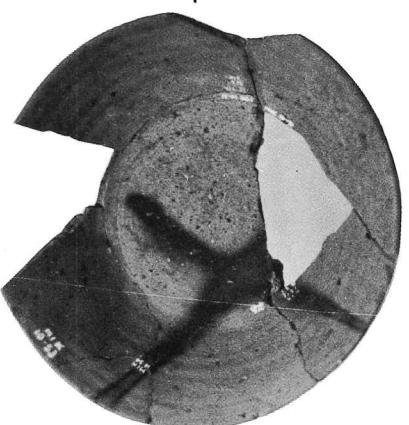
上面より



下面より

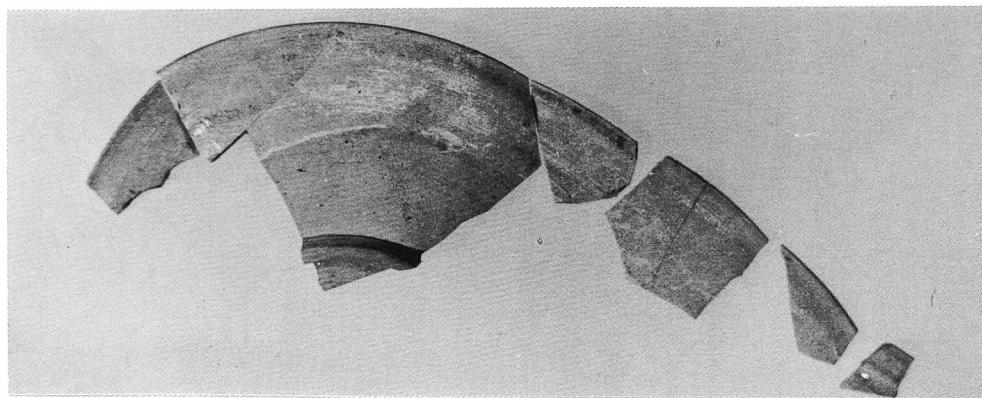


22

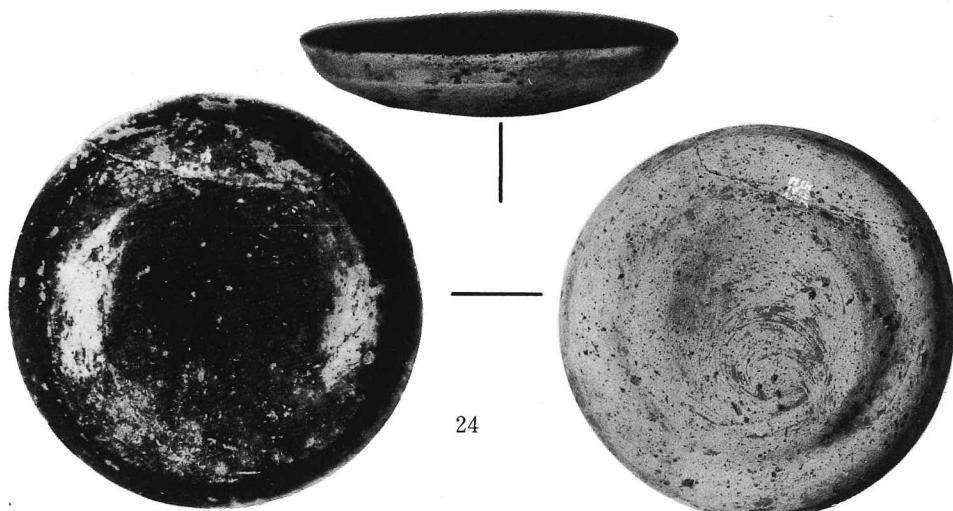


第八図版

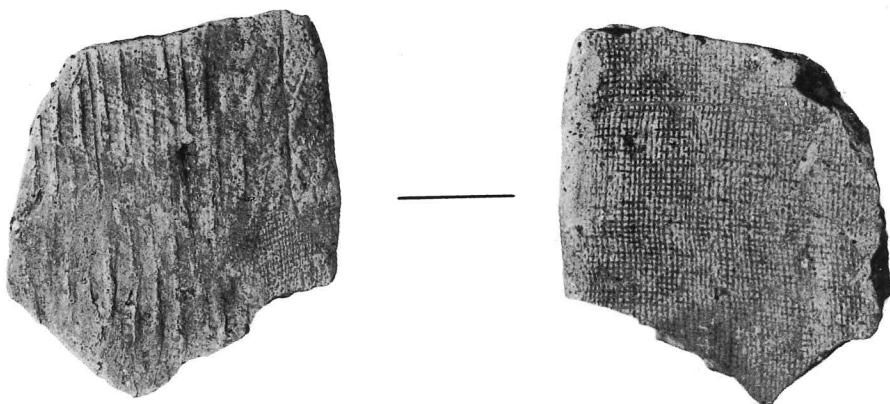
第四号住居址出土遺物



23



24



25

第九図版 グリッド出土遺物・調査風景浅間山を臨む



26



27



28



29



30



31. A地区調査風景(右浅間山を臨む)

犬飼遺跡第2次緊急発掘調査

—蓼科山北麓における平安時代後葉期の調査—

印 刷 昭和54年3月20日

発 行 昭和54年3月30日

発行者 北佐久郡望月町
望月町教育委員会

印刷所 南佐久郡白田町 2016
白田活版株式会社